

If I Forget Thee, Jerusalem の構造

The Structure of *If I Forget Thee, Jerusalem*

山下 昇

1

1990年に The Library of America が William Faulkner(1897-1962) の小説集を出版した際に、従来 *The Wild Palms*(1939) として通用していた作品を、*If I Forget Thee, Jerusalem* とタイトル変更して収録した。¹⁾ このタイトル変更は大層重要な意味をもっている。と言うのは、今回つけられたタイトルが実は本来作者がつけようとしたものであり、初版以来半世紀余を経てようやく作者の意志が実現したのである。またそれにとどまらず、このタイトルは作品解釈の上で決定的な重要性をもっている。

従来この作品が *The Wild Palms* と呼ばれている間は、この小説を構成する二つのプロットは、“Wild Palms”、“Old Man”と表記され、体裁上からも“Wild Palms”というプロットがメインであり、“Old Man”はサブ・プロットないしはコミック・リリーフに過ぎないという意見に異議を唱えることは困難であった。分量から言っても、“Wild Palms”の方が6割も多い。おまけに作者自身がこれは Harry と Charlotte の物語だと述べているのだから形勢は益々不利であった。²⁾

しかし、今回のオリジナル・タイトルの復元によって事情は若干変わったと言えるだろう。それぞれのプロットは“The Wild Palms”、“Old Man”とされ、新しいタイトルの下に対等の地位に置かれたと言える。一見したところ無関係と思える二つのプロットを交互に配した構成のために、ひどい場合には別々の物語として分離して収録されることさえあった。だが、これらは切り離せない二つのプロットとして一つのテーマを表裏一体となって示しているのだ。そしてそのテーマを表すタイトルとしては *Jerusalem*こそが相応しいのだということを、作品構造の分析によって裏付けるのが小論の目的である。

2

Faulkner がこの小説に着手したのが1937年9月15日、その後 “The Wild Palms” (以下 TWP と略記) と “Old Man” (以下 OM) のプロットを交互に書き進め、1938年6月15日に MS を完成したことは Garland から出版された *Holograph Manuscripts* に明らかである。その後同月中に TS を出版社にむけて送ったこと、並びにそのときのタイトルが *Jerusalem* であったことなどは、書簡集の中の R. Haas 宛の手紙に見るとおりである。しかし後述するようないきさつもあって、作品はタイトルを *The Wild Palms* として1939年1月19日に出版されたのであった。

Jerusalem の原型となるものは、医師を主人公とする短編小説として1937年9月15日以前に着想されたもので、そのことを示す MS 6 ページ、TS 22 ページがヴァージニア大学図書館に保存されているとのことである。³⁾ そのストーリーでは心の平安を外部の者たちに乱されたくないという医師の意識を描き出すことが主眼であった。ところがやがてこの医師に関わりをもつ人物、即ち Harry と Charlotte の物語へと転じていくにつれて、短編の枠組みをはみ出し、長編小説となっていったのである。そしてその物語の 1 章を書き終えた時点で、何か欠けていることを感じて、囚人の物語を対位法として書いたということは現在では周知のことである。

この小説は全10章から成っている。その10の章を TWP と OM という二つのプロットが5章ずつ分け合い、交互に組み合わせられている。⁴⁾ TWP は Harry と Charlotte の物語、OM は背の高い囚人 (the tall convict) と妊婦 (the pregnant woman) の物語である。この二つのプロットは一つの小説を構成しているながらも、登場人物、時間と場所の設定等において何等共有するものがない。しかし詳細に検討してみれば全く無関係なものをつなげているだけではないことが分かる。出血、本を書くこと又読むこと、水、鹿、ナイフ、ねずみ、タバコ、医師、監獄など共通のシンボルや、墮胎と出産などの対比が周到に配されて対位法的な効果をあげていることは一目瞭然である。

加えて、その双方がいわゆる回想的構成 (retrospective structure) を有しているのだが、その回想がなされる時間と場所は近い将来に統合されることが示唆されている。小説の終りにおいて TWP の Harry は1938年8月に50年の刑を言い渡されてパーチマン刑務所送りになる訳だし、OM の囚人は1927年6月24日にパーチマンに戻り、残りの刑期 8 年に更に10年を加算され、1945年まで服役することになるので、この小説の終りの直後、即ち1938年の初秋にこの二人がパーチマンで会う可能性は極めて高いのである。

このように最終的には統合されていく二つのプロットがそれぞれ回想的構成をもっているといっても、その語りの方は同じではない。TWP は、Harry の回想に該当する物語を全知の視点から描出している。第9章の最後の場面に見られるように、Harry の決意は

〈意識の流れ〉として心の中に閉じ込められており、彼自身も監獄に閉じ込められている。そのようにプロット全体を通して Harry と Charlotte の物語は閉塞状態にあり、それをもたらしている主たる要因は、彼らが「愛」という観念にとらわれていることである。彼らは「愛が不毛である」という観念をもちながら、愛を求めて止まないという自己矛盾に陥っているのである。

一方、OM は背の高い囚人の回想だが、この語りは明らかに発話された対話である。このプロットは1927年6月末に、7週間の「旅」からパーチマンへ戻った背の高い囚人が、太った囚人相手に行う対話である。これは個人の意識の中に閉じ込められたものではなく、相手に対して開かれ、相手の対応によっては変化をとげてゆく語りである。別な言い方をすれば、南西部ユーモアのほら話を語る語りの方法を基本的に使っているのだと言えよう。

このように回想的構成という点では共通していても、その語りの方が異なっているのだが、そのことの意味と、それぞれのプロットの構造とがどのような関係にあるかを、次に検討してみよう。その際にそれぞれの真ん中の章（第5章、第6章）が典型的な構造を有しているの、それらを中心として考察をすすめよう。

3

TWP のプロットは客観描写である。その真ん中の章である第5章も同様であり、物語はすべて語り手の語りの枠内に閉じ込められている。その枠内で語られる物語は、Harry と Charlotte のシカゴでの生活、ウィスコンシンの森への逃避、再びシカゴでの生活、というように結局は出発点に舞い戻る円環構造となっている。

シカゴの生活は、当初は彼らの目的であった「自由」、「永遠に続くハネムーン」としてスタートするが、ニュー・オリンズ出身の McCord と知り合ったことをきっかけに、“... their apartment had become a sort of evening club.”(555) と、すぐにニュー・オリンズの生活と同じパターンに陥ってしまう。また、自分を活かすという目的のために作り始めた Charlotte の人形も、すぐに商品として売買されることになる。都市においてはすべてが商品化されてしまうのである。これに対する Charlotte のささやかな抵抗が彼女の作った人形の一つ Bad Smell である。都市の力から逃れるために彼らは新しい場所、エデンの園であるウィスコンシンの森へ移る。

ウィスコンシンの森は、シーズン・オフということもあり、殆ど彼ら二人だけの孤立した生活を一時的に与えてくれる。その解放感は次のように表現されている。“It was the mild weater. Like time had stopped and us with it, like two chips on a pond.”(574) Charlotte は Harry を実際に “Adam”(569) と呼び、裸体で水浴し、彼らは束の間ながらエデンのような生活をおくる。しかしアダムとイヴが楽園を去らなくてはならなかったよ

うに、現代のアダムとイヴは、冬がやってきて食糧が尽きれば結局都市へ戻らなくてはならなくなる。Harry が苦しくも先のパッセージで述べているように、彼らは池に浮かぶ木くずのようなもので、自由ではあるが波風に翻弄されるちっぽけな存在である。

エデンを出たイヴはデパートのインテリア・デザイナー、アダムは告白小説家というもっとも商業主義的な職業につく。しかもそれぞれの職業において彼らは結構成功するのである。純粋な愛を求める二人が、生活のためには働かなければならない、職業において成功すればするほど、すれちがいの生活を送るはめに陥ってしまう、というパラドックスに彼らはとらえられる。“... daily I watched myself getting more tangled in it like a roach in a spider web...”(586) というような閉塞状態に自分たちがいることに Harry は気付く。ここでも自分達の存在の卑小さ、無力さは的確な比喻で表現されている。また自分達だけではなく、都市に生きる人々が皆そうであることを発見し、次のように考える。

It was the city I was thinking of he thought. The city and winter together; a combination too strong for us yet — the winter that herds people inside walls wherever they are, but winter and city together, a dungeon; the routine even of sinning, an absolution even for adultery. (581)

人々は壁の内側や地下牢や決まりきったこと（ルーティン）に閉じ込められているという閉塞感が如実である。この閉塞状態を打ち破るには一つしか手段はない。かつて繰り返してきたように、再び脱出を試みることである。

このようにまず日々の生活が彼らにとっては繰り返しという円環でしかない。それを避けるために都市を脱出するのだが、結局都市へ舞い戻るしかないという円環に閉じ込められているというのが、この章で到達するかれらの認識である。それを打ち破るためにこの章の終りの部分で、次の場所ユタ州の鉱山へ出発するのだが、結果は同様である。

第7章ユタの鉱山は更に閉じ込められた場所で、そこで彼らは商業的な生活からは解放されるが、一部屋を共有するという環境の制約のために性交さえまならぬ6週間を送る。都市とは異なり田舎の生活は閉塞状態を免れているように思えるが、実際のところは貧困や無知が支配していて、別の閉塞状態であることはすぐに明らかになる。6週間の制約から解放されて行った性交が彼らを決定的なわなにはめるのである。

閉塞の状態が墓場だとすれば、それは同時に子宮でもあるという認識がHarryにはある。“grave-womb or womb-grave”(589) という認識には、Harry の一種の誕生（再生）願望が投影されていて、Charlotteとのこの一年間の逃避行は、いわば母の体内から産まれて出るためのあがきである。実際彼は“... there is something in me she is not mistress to but mother.”(591) とさえ述べている。彼は自分が“foetuslike state”(570) にいるとも感

じており、Charlotte が妊娠した胎児は彼自身（の分身、愛、希望）なのである。Buckner には施して成功している墮胎手術を彼が Charlotte に対しては執拗に拒否するのはこのためである。

Charlotte に強制されて Harry はとうとう手術を実行するが、これは自分の誕生(再生)を不可能にすることであり、自分達の愛を抹殺することであった。結局彼らの〈愛〉は墮胎され、その母である Charlotte は死ぬ。父である Harry は、母である Charlotte(の肉体)も、彼らの子どもである〈愛〉も失い、ただ愛の〈記憶〉だけが彼に残るのである。しかし〈無〉よりはその〈記憶〉即ち〈悲しみ〉を選ぶというのが Harry の選択である。彼にはその選択しか残されていないのである。

別な言い方をすれば、Harry は愛の不在という観念にあまりに強くとらわれているのである。彼の現代における愛の認識は次のように悲観的ないし絶望的である。

... it was the mausoleum of love Because this Anno Domini 1938 has no place in it for love They will have to find something else to force us to conform to the pattern of human life which has now evolved to do without love(590)

このような同時代認識をもてばもつほど彼は愛にしがみつ়くことになる。彼はすべてを失くして、50年の刑でパーチマン送りになる。皮肉なことにそこは刑務所でありながら「外壁のない」刑務所で、必ずしも閉塞的な空間ではない。しかし彼にとっては、自分の心が〈愛〉という観念に支配されている以上、刑務所であろうと、壁があろうとなかろうと同じことなのである。

第9章の最後の場面をもう少し詳しく見てみよう。独房のなかで Harry は次のように考えている。

Because if memory exists outside of the flesh it wont be memory because it wont know what it remembers so when she became not then half of memory became not and if I become not then all of remembering will cease to be. — Yes he thought Between grief and nothing I will take grief. (715)

現代の愛の不在が、愛の絶対化にHarryを導いていることは上に述べた通りである。そして愛の根拠を彼は記憶の肉体性に置いている。批評家の指摘を俟つまでもなく、この当時の作者が不滅性の証として痕跡を残すということにこだわったことはいくつかの作品に顕著である。⁵⁾ この物語のこの部分にそのメッセージがストレートに表されていることは明らかである。ただ先ほど言及したことだが、語りの方法の面から言えば、この部分に顕著

に見られるように、Harry の語りは彼の〈意識の流れ〉として内面化されている。つまりこのメッセージは彼の意識の中に閉じ込められているという訳である。また更にはそれが全知の語り手の語りの中に閉じ込められているのだから、出口なしとも言えるだろう。

以上見てきたように、TWP のプロットは幾重かの円環構造を成している。基本的に個人は彼の意識の中に閉じ込められている。また彼の意識は、個人が日々のルーティンや壁や都市や商業主義や時代に捕らえられているという閉塞状況の認識である。そして墮胎と Charlotte の死に見られるようにその円環（閉塞状況）を打ち破る企ては失敗する運命にある。このように何重かの円環のなかに閉じ込められたものとして人間が描かれている。空間的な移動に関しても、ニュー・オリンズから始まり（第3章）、アメリカの各地を巡って（第5章、第7章）再びニュー・オリンズに戻ってくる（第7章）という円環を構成している。更に語りの枠組みとの関連で言えば、第1章ミシシッピ州の海岸での語りに始まり、第9章で再びそこへ戻っているという円環がプロットの一番外側を形成している。そして最後にHarryが行き着く所が、外壁こそないが刑務所という閉ざされた場所、刑務所なのに外壁もないというパラドキシカルな場所である。結局のところ、ニュー・オリンズの病院にいても、シカゴのアパートにいても、ユタの鉱山にいても、ミシシッピの刑務所にいても、意識が解放されないHarryという人物の自己呪縛の姿をこのプロットは描き出している。

4

OM のプロットも一種の円環構造をもっている。物語の冒頭第2章はパーチマン刑務所で始まり、物語の結末第10章も再びパーチマンに戻っている。あるいは、真ん中の章（第6章）で、“This is how he told about it seven weeks later . . . on his bunk in the barracks” (602) とあるのではっきり分かるのだが、このプロット全体の語りが事件終了後にパーチマンで回想として再構成されているのである。七週間の出来事を回想しているのだから、一種の円環構造をもっているのだが、語りの形式としては必ずしも閉じられたものではない。主には背の高い囚人が太った囚人に自分の経験談を語っているのだが、随所において太った囚人の方も合いの手を入れたり、質問をしたり、コメントしたりしている。つまりこれはダイアログによる再構成の作業であり、むしろかなり開かれた語りであると言える。

空間的には、上述したように最終的に元の場所に戻ってきているが、その過程においてはしばしば堂々巡りをしながら移動を行っている。例えば第6章では、囚人は沼地に迷い込み、“... he had merely described a big circle” (594) と、しばらくは同じところを回転している。妊娠している女に出くわして、回転してきたことを知らされるのだが、そ

のように彼は自分がどこにいるのかということを知りていない。

“Which way you fixing to go?” the woman said.

“Never you mind that. You, just keep on holding on.”

“Ask the boat. I been in it since breakfast and I aint never knowed, where I aimed to go or where I was going either.” (598)

彼はひたすら命令を実行してパーチマンに戻ることを考えているが、いくつかの悪条件が重なって彼の目的達成はしばしば妨げられる。そのような状態は “. . . existing now . . . in a state in which he was toy and pawn on a vicious and inflammable geography.” (605) と描かれているように、彼自身がより大きな力によって動かされているのである。

その大きな力とは、一つはおんなと出産という事態であり、もう一つは言うまでもなくオールド・マン即ちミシシッピ河である。この囚人はおんなに騙されたようないきさつから牢獄生活を送っている。刑務所にいる限りは、おんなからは自由で、生存を脅かされることはない。刑務所は “no walled penitentiary” (509) で、“it is a cotton plantation” (509) である。ライフルやショットガンで見張られているので、自由という訳ではないが、彼のような貧農にとっては、食事と住居と安全を保障されている場所であり、服役ではあるが、彼にとっては文字通り生活以外の何物でもない。相棒の太った囚人は “in a long apron like a woman, he cooked and swept and dusted” (512) と描写されるような人物である。この点から言っても牢獄の生活は、錯倒しているが、彼にとっては自足した世界である。

その彼が洪水というもののせいで、自足した世界から無理矢理引っ張り出され、さまざまな困難に直面させられる。彼は愛に幻想を抱いていないし、おんなを求めていた訳ではないのに、おんなを救出するよう命令され、そのおんなと7週間も寝起きをともにするはめに陥る。しかもそのおんなは出産を間近にした妊婦であり、彼は独身の身で産婆の役までさせられるのである。またその女の夫でもないのに、おんなと子どもの保護者のように振る舞うことを余儀なくされる。このようにおんなは彼にとっては疫災のもとである。このプロットは愛を求めてもない彼が一つにはおんなに翻弄される物語である。

第6章の初めにおいて彼は、“He was now in the channel of a slough, a bayou, in which until today no current had run probably since the olden subterranean outrage which had created the country.” (592) というように未踏の自然に誘い込まれる。そこでこれまた自然の力の象徴であるおんなと出産に遭遇することは上で述べた通りである。その出産が行われる場所は、蛇がいるような “an Indian mound” (614) であり、エデン的な設定ではあるが、イヴは既に誰かの子どもを妊娠していてすぐに出産するという皮肉な状況である。

(あるいはヨゼフと聖母マリア、およびイエスの誕生に例えることもできる。)

このような事態を招く根本的な力はミシシッピ河の洪水である。第6章での出産を終えた後、第8章において囚人とおんなと赤ん坊はいつのまにかミシシッピ河に乗り出し、バトン・ルーシュの方まで下っていき、数週間かけてようやくヴィクスバーグへ戻ってくるという円環的な小旅行を行うのである。そしてこの小旅行を含む囚人の7週間すべてが、ミシシッピ河の洪水という、本来のコースから逸脱のうちに起こった事柄であった。この点に関しては、次のように描かれている。

When he saw the River again he knew it at once. He should have; it was now in-
eradicably a part of his past, his life; it would be a part of what he would bequeath . .
. . . But four weeks later it would look different from what it did now and did: he (the
old man) had recovered from his *debauch*, back in banks again, the Old Man . . .
crowned with the rich green summer in the willows . . . (682-3) [イタリック筆者]

ミシシッピ河が数年に一度起こす洪水が、気ままな逸脱、放蕩であって、数週間の後にまた元のコースに戻るように、この囚人の7週間の「旅」も一時の逸脱にすぎない。彼はパーチマン刑務所という居心地のよい子宮のような場所に胎児のように暮らすことに満足しているのに、洪水の気まぐれによって無理矢理外の世界に引っ張り出されたのである。その点から言えば、洪水は彼の出産であり、妊婦が産んだ赤ん坊は彼の分身であるとも言えよう。しかし、“That’s [Parchman is] where I told him I wanted to go.” (660) と主張するように、彼の目的はあくまでも元の場所へ戻ることである。そして、最後にはその目的を達成する。決して逃亡を試みた訳ではないのに、役人たちの都合によって逃亡の罪を着せられ、更に10年間の服役が加算される。普通なら耐え難い状況であるが、この囚人にとっては必ずしもそうとは言えない。今やパーチマンを故郷のように感じている囚人にとっては更に10年間の保障を得たとも言えるのである。

このように OM のプロットは、囚人という閉ざされた世界の住人が、自分の意志に反して外部の開かれた世界へ一時的に放り出され、最後には希望通り再び元の場所に帰ってくる、そしてその場所は刑務所でありながら必ずしも閉塞的な空間ではないという物語である。そして語りの方は回想でありながら、現在時における対話による再現というオープンな形式である。OM プロットの最後の章の最後の文は、“Women, shit,” the tall convict said. (726) という明らかに肉声として発せられたものの描写である。

5

このように二つのプロットを見てくると、一見したところ無関係と見えたもの同士が、実は構造や主題の点で類似していることが分かる。同時に類似していると思えるものが、よく見てみると異なっていて対照的な関係にあることもはっきりしてくる。二つのプロットのそのような関係が対位法的であるということは従来からよく指摘されてきているところである。その対位法的構成の効果についてはよく指摘される通りであるが、それらを統合する原理として、この小説の（復元された）タイトルの意味を考えてみよう。

“If I Forget Thee, Jerusalem”というタイトルは聖書の「詩篇」137篇第5節から採られたものである。少し長くなるが137篇全9節を引用する。

By the rivers of Babylon, there we sat down, yea, we wept, when we remembered Zion. We hanged our harps upon the willows in the midst thereof. For there they that carried us away captive required of us a song; and they wasted us required of us mirth, saying, Sing us one of the songs of Zion. How shall we sing the LORD's song in a strange land? If I forget thee, O Jerusalem, let my right hand forget her cunning. If I do not remember thee, let my tongue cleave to the roof of my mouth; if I prefer not Jerusalem above my chief joy. Remember, O LORD, the children of Edom in the day of Jerusalem; who said, Rase it, Rase it, even to the foundation there of. O daughter of Babylon, who art to be destroyed; happy shall he be, that rewardeth thee as thou hast served us. Happy shall he be, that taketh and dasheth thy little ones against the stones.⁶

この詩はバビロンに補囚されたユダヤの民の嘆きと、聖地エルサレムへの忠誠心の表明である。その内の一節である「エルサレムよ、もしわたしがあなたを忘れるならば、わが右の手を衰えさせてください。」とは文字通りには、敵のまえでハープが弾けなくなるように右の手を萎えさせてほしいという懇願である。これを *Jerusalem* に適用すれば、TWPのHarryがCharlotteとの愛を忘れたならば、墮胎を実行した右の手を萎えさせてほしいということに呼応していることは明らかである。そしてOMの囚人の場合は、パーチマンへの〈愛〉を忘れたなら、ボートのオールを漕ぎ、妊婦の出産を手助けした右の手を萎えさせてほしいということになる。

TWPのHarryは最後にパーチマン刑務所に捕囚され、今は失くなってしまったCharlotteとの愛の思い出に生きることを決心する。OMの囚人は彼にとってのエルサレムであるパーチマンを忘れず、念願通りパーチマンに帰り着くのである。しかしそのエルサレ

ムは、外壁が無いとは言え刑務所という閉じられた場であることは事実である。このように TWP では、主人公はエルサレムを求めてアメリカ各地を転々とした揚げ句、現代においては心の中にしかエルサレムは存在の余地が無いのだという認識に達する。他方 OM では囚人は念願叶って彼にとってのエルサレムへ帰還することができるが、それは刑務所であるという転倒したエルサレムである。⁷⁾ このようにいずれのプロットにおいてもエルサレムは本来の聖地ではない。Faulkner がこの小説に *Jerusalem* というタイトルをつけようとした時に、反ユダヤ主義的で “objectional title” だという非難を受ける心配があるから変更しようと R. Haas が提案したというのも故ないことではない。⁸⁾ しかし小論において検討してきたように、この作品全体が記そうとした現代の愛と生のアイロニカルな情況というテーマを統合するタイトルとしては *Jerusalem* がふさわしいことは明らかである。

注

- 1) William Faulkner, *Faulkner: Novels 1936-1940* (Selected, edited, and annotated by Joseph Blotner and Noel Polk) (New York: Literary Classics of the United States, Inc., 1990), pp. 493-726. *If I Forget Thee, Jerusalem* [*The Wild Palms*]
但し、内容にはあまり変更がない。タイポグラフィカルな誤りを訂正したのが主であり、小説最後の “Women, . . . t!” を “Women, shit,” と復元したのが目立つ程度である。以下 *Jerusalem* と略記する。テキストには上掲書を用い、引用末尾のかっこ内にページ数を記す。
- 2) Joseph Blotner (ed.), *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977), p. 106.
- 3) 小山敏夫氏 (関西学院大学) のご教示による。
- 4) Michael Millgate, *The Achievement of William Faulkner* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1978), p. 175. によれば、TWP の第 2、第 3 章、OM の第 1、第 2 章は、最初それぞれ併せて一章ずつであった。
- 5) *Absalom, Absalom!* (1936) の墓石の文字や Judith の手紙、*The Unvanquished* (1938) の Syria Cook の窓ガラスの引っ掻き疵、*Requiem for A Nun* (1951) の Cecilia Farmer の壁の落書き等。
なお、このテーマに関しては、
Joan S. Korenman, “Faulkner and ‘That Undying Mask’” *Studies in American Fiction*, 4 (Spring 1976), 81-91.
等の論考がある。
- 6) *Bible*, Psalm 137.
- 7) François Pitavy, “Forgetting Jerusalem: An Ironical Chart for *The Wild Palms*”, *Intertextuality in Faulkner* edited by Michel Gresset and Noel Polk (Jackson: University Press of Mississippi, 1985), pp. 114-127. では、この作品においていかにエルサレムが錯到した (inverted) イメージで描かれているかを詳しく分析している。
- 8) Joseph Blotner, *Faulkner: A Biography* (New York: Random House, 1974), p. 1102.

(本稿は、1991年日本アメリカ文学会関西支部7月例会における口頭発表に加筆、訂正をしたものである。)